七月四日付 読売新聞

第二の手、または引用の作業

LA SECONDE MAIN OU LE TRAVAIL DE LA CITATION

アントワーヌ・コンパニョン著

評・今福 龍太（文化人類学者）

新たな創造を求めて

人間の言語活動が、反復と再使用によって本質的に特徴づけられていること。決定的に新しい、独創的な言葉や文章など実はなく、誰が発する言葉も、すでに別の誰かによって語られたことの反映にほかならないこと。私たちはこのことに気づいている。だから言語表現における独創性とは、他者の言葉に依存しないことではなく、むしろ先人の言葉を呼び出し、厳密に批評し、再定義してゆくたえざる努力によって保証されるような何かである。そのとき「引用」とは、あらゆる言葉の創造と運用において鍵となる本質的な行為となる。

水声社
8000円

本書はパリでフランス近現代文学を講ずる碩学による、引用という行為を手がかりに「書くこと」の意味と歴史に迫ろうとした刺戟的な論考である。ここで引用は、あらゆる「書かれたもの」に内在する相互注釈の関係、すなわち「間テクスト性」を成立させる原型的な運動としてとらえられる。プラトンの時代の「類比」の観念。ルネサンス期のエラスムスによるエンブレム（寓意表徴）の活用。二〇世紀文学におけるジョイスやボルヘスによる世界の隠喩的再構成。こうした引用の諸過程の精緻な分析を経て、現在の私たちの言語空間が間紙すなわちインキの裏移りを防ぐために印刷済みの紙の間にはさむ紙のような、無数の言葉から転写されたインク染みと汚れのパッチワークとしてある、という著者の指摘がとりわけ面白い。

安直なコピー&ペーストによって、引用や複製が際限なく電子空間を覆いつくす現在、引用という歴史的な現象が書物を通じて示してきた「書くこと」の豊かな相互作用は忘却されつつある。著者は「新しいものではなく、新たに」というラテン語の警句を強調する。全く新しいものの開発や創造ではなく、既にある物を異なった容器や装置に組み込んで新たな文脈において再生させる手際を、現代は常に求めている。言葉においても、それ以外の領域においても。今井勉訳。

◇Antoine Compagnon＝1950年、ブリュッセル生まれ。